

## 自由図書の一部 佳作

荒木美羽さん 文学部日本文学科 1 年

『竹取物語と中将姫伝説』梅澤恵美子著 三一書房

### 正史のマジック

歴史書がすべての正しい歴史を語っていると断言できるか。このことを念頭におくと、『竹取物語』は日本最古の物語として知られているが、架空のおとぎ話とは違った一面を秘めているのかもしれない。

まず、この本のあらすじについて説明する。『竹取物語』に登場するかぐや姫、そして姫に求婚する 5 人の男たちは実在した人物である、という意見をはじめとして、鬼(童子や翁)の概念、藤原氏を中心とした当時の権力者たちの争いまで話を拡張させ、作者は様々な視点から、『竹取物語』に隠されている歴史的なメッセージを読み解いていこうとする。

本の中で一番印象深い言葉に「政権争いには、必ず勝者と敗者が生まれ、勝者は正史として歴史書を残すことができるが、敗者側の歴史書というものは抹殺されるのが常である。(略)つまり、敗者側の者達には、後世に託すべき“歴史書”は残せなかったのである。」とある。つまり、歴史書とは当時の天皇や権力者が自分の正統性を示すために作られたものであるということ、そして、権力争いに負けた歴史上の敗者は歴史を語れず、物語や和歌によって後世に自分たちの歴史を伝えようとした。だから、歴史書とは勝者によって自分や一門に都合の良いように誇張され、本来とは違うように書かれている、ということである。一見当然のことだと思われるかもしれないが、この本の中で“歴史書”とは重要な意味を持っている。だからこそ、作者が私たちに一番伝えたい言葉でもあると思う。

さらに、この本の興味深いところは、作者の語る歴史が私たちの習ってきた歴史の内容と大きく異なっている、と考察しているところにあると思う。確かに、歴史書を作る仕事に関わるということは、それだけで名誉なことであり、ある程度の身分や地位のある者であることは予想できる。そして、例えば藤原氏のように栄華を極めた者が、自分にとって

不都合な他の堅実な貴族を滅亡させたとして、はたしてそれをすべて正直に歴史書に書くだろうか。後世まで残る書なら尚更自分を正当化させ、あたかもヒーローのように書くに違いないだろう。このことに気が付いたとき、歴史書の記述はどこまで信じるべきか、このような歴史の裏側を物語に託してまで伝えたかった作者の真意はどこにあるのか、と考えを巡らせることができる。

この本の作者の考察は歴史と上手くリンクしつつも、正史の内容を鵜呑みにせず、敗者側からの恨みの経緯についてよく研究し、自分なりの解釈を試みている。『日本書紀』の記述を提示した後で、ほかの資料と比較してつじつまが合わない部分を取り出し、話題を転換していくといった構成になっているため、必然的に『日本書紀』を疑わざるを得ないような説得力を持っている。作中の謎をパズルのように解き明かしてゆくので、テンポがよく非常に読みやすいのもこの本の魅力だと思う。

『竹取物語』はただの天人女房型説話ではなく、歴史の敗者にとっての正史のような役割を果たしていると分かり、これまでのおとぎ話とは全く違った印象を受けた。歴史を語れないはずの敗者に作られた“歴史書”『竹取物語』が、本来正史であるはずの『日本書紀』よりも現代の私たちにとって親しみがあるとは、驚くべきことである。この本によって、『竹取物語』の解釈が改められるだけではなく、かぐや姫や皇子たちに中将姫伝説やモデルとされたであろう人物たちを重ねて読むことで、より純粋な文学にも触れることができるのではないだろうか。